

巻頭言

世俗化論を越えて

はじめに

一九六〇年代後半から七〇年代全体にかけては、今から振り返れば、宗教社会学の領域において、「世俗化」をめぐる論議、論争が、きわめて華やかであった。当時は、この学問では、新宗教運動と並んで、研究者たちが熱中した二大テーマの一つが世俗化論だったように思う。さまざまな見解が併立し、相闘い、正統性をめぐってしのぎを削った。

七〇年代なかば、しかし、日本の学界では、二、三の先駆者を除いて、欧米の文献の紹介の段階にとどまって

いるように感じられた。それもあって、CISR（国際宗教社会学会）東京会議を企てたとき、会のセッションの一つに「世俗化の規定」を設け、ルックマン、ウィルソン、マーチン、ドベラーレなど、それぞれ世俗化の問題について対立する一派を作るほどの影響を与え、それに関する著作、論文を持つ諸氏を招いた。

会場における各氏のやり取りは、外国語を使って行われたから、私にとっては、残念ながら、本心に、激しい息づかいまで加えての迫真の論争をその通り実感することはできなかった。しかし、自分の学説を力説し、他の説を反ばくしようとする気迫は、会場を圧したことは事

柳 川 啓 一

実であつたに違いない。諸氏は、CISRでよく知り合つた親しい仲であるだけに、ぶつかり合いも、儀礼的なものではなかつた。

こうした昔のことを思い出す。いま、上にあげた諸氏（現在も健在であり、宗教社会学の重鎮である）に、新鋭の研究者を加えて、同じテーマ、「世俗化」をかかげ、討論を行つたら、どうなるだろうかとも想像する。憶測では、かつてのように白熱したディスカッションとはならない。よくいえば冷静、さめた雰囲気のものであろう。あるいは、もっと悲観的に見れば、テーマとして取り上げることに、あまり気乗りしないかもしれない。

世俗化論議は、俗っぽい言葉でいえば、現在、八〇年代後半には、「流行」していない。かつては、宗教社会学の研究者は、この分野に熱っぽく取り組むことが多かった。私など専門にしていなくても、大いに関心はあつた。そのころ、小学館の百科辞典の宗教学関係の項目選びをやったとき、「世俗化」を入れておいたのだが、編集者から、これはどういうものかという質問があつた。一般にはそんなに知られていない術語かと不審に思い、

手もとの『広辞苑』の三版を引くと、「世俗」の普通の言葉の項目はあつたが、「世俗化」はなく、この辞書の宗教学関係の立項者も無知であると分かつた。しかし、私も大きなことは言えない。三、四年前に書いた原稿以来、「はしか」を通り過ぎたように、世俗化の勉強はしなくなつてしまつた。私が流行に弱く、流行が終わると離れてしまうという欠陥した性格のせいであらう。

世俗化論は活力を失つたか

しかし、「世俗化」という現象そのものは、流行ではなく、継続している傾向に違いない。現代社会における宗教を研究するものは、直面する現実である。ではなぜ、その議論がかつてのように白熱しなくなつたのか。もしそう断定するのが私の間違つた思い込みであれば、私のこの論旨は全く無意味になる。しかし、この特集号が「世俗社会と宗教——対立を越えて」とあるのは、学問（この場合もちろん宗教学、社会学、宗教社会学）の新しい分野を探索せねばならぬという意味であらう。世俗化論を強敵として批判するのではなく、世俗化論が、かつてのよ

うな、新鮮な、衝撃的な活力を学問に与えなくなつたからではないか。

世俗化論は活力を失つたとみえるが、世俗化（それはどのような定義であるかを別として）それ自体は依然として進行しつづける。世俗化の一つの定義の「非宗教化」（宗教の定義がどうなのかは、これも別として）の傾向が止まり、社会が「宗教化」しつづけるという立場に立つと、世俗化論への事実に基づく、もつとも有力な挑戦であるが、それは立証が難しいだろう。マスコミでは、日本はいま第三次宗教ブームだという叙述も散見するのだが、それでは、第一次、第二次は何を証拠として、いつ頃の何をさすのか不明確であるし、今が宗教ブームであるという具体的証明はできないし、百歩ゆづつてブームであるとしても、ブームという以上は、永続するのではなく、ブームが終わつたときに世俗化がまた進むのではな

をすぐれた着想で分類している。巻末のビブリオグラフィでは、実に二百四十八の著書、論文をあげ、その中に見られる世俗化の概念を検討する。今から六年前だが、目立つ世俗化研究文献では、最近の方なのである。つまり、続々と新説、奇説が現われるのではなく、従来の研究のまとめの段階に入っている。私自身は、そんなに沢山の世俗化論を読み尽くすことはないのだが、独断的に、学説を分類してこうみている。まず、時代を問わず、たとえ古代においても、世俗化現象があり、それへの反発もあるという説と、近現代、とくに第二次大戦終結後、一九五〇年代のヨーロッパに発し、北アメリカ、さらに世界各地に及んで行く現象とみる説に分かれる。ここでは、現代社会における宗教をみたいので、後者の説に限る。後者の説をさらに分けると、簡単に要約しすぎる恐れはあるが、一応、三つに分ける。

(1) 非宗教化して行く傾向。

(2) 宗教が、非宗教の文化、社会制度と分化する過程がいよいよ激しくなる。しかしこれは非宗教化ではなく、宗教の独自の領域が明瞭になつて来るという見地。

ドベラーレの『世俗化』（一九八二）は、世俗化の概念

(3) 宗教の概念、あるいは存在様式が、大きく変動する時代にさしかかっているので、伝統的様式の宗教が衰えたように見えるので、宗教そのものは、ずっと存続しているという解釈。

この三説に異説がある方も多いだろう。私の分類は一つのまとめ方に過ぎない。世俗化理論が、次第に出尽くして来て、刺激性を失いつつあるのではないか、だからこそ、まとめ、分類ができるのだらうとしたいのである。では次にどうするか。宗教社会学に限らず、学問すべての分野で、これまでの研究対象のアプローチが行きづまったとして、この成果を棄てて、別の対象、分野を探すのだろうか。それでは、学問の進歩はないだろう。世俗化論が明らかにした、社会における宗教の位置という理論の結実を受けつぎながら、乗り越えようというのが、この論文集の意図である。

聖俗二元論からビヨンドへの志向

一つだけ、私の思い付きをつけ加えておこう。世俗化論は、ヨーロッパの学問が初めに取り上げたすれば、

その地の宗教をめぐる問題には、「聖と俗」の二元論が当然の前提になっているのではないか。非宗教化説には、聖の領域に俗が進出、侵食して来たという実感がこもっているようにみえる。

日曜日の礼拝出席者が減少したとすれば、聖なる日である安息日が、俗なるレジャーの日に変りつつある。俗の侵略と受け取られる。また、分化説では、聖と俗の二分が明らかになったことで、むしろ、「本来」の宗教のあり方にふさわしくなったと歓迎さえしているとも見られるかもしれない。また、新しい宗教の概念に変わりつつあるという学説への批判の一つは、宗教の概念を拡張するということであったが、この批判は、宗教を聖と俗の関係、対立からはずれているということではないか。聖俗二元論をどうとらえるか、キリスト教の二元論に基づくのか、日本人の——キリスト教に詳しくない日本人の——キリスト教文化に対する誤解なのか、あるいは、世俗化論を欧米の現象のみならず世界の宗教一般に貫徹する理論となるには、聖俗二元論の前提を再考するところから出発してもよいのか。

しかし聖俗二元論を検討する途として、二元論にかわって三元論を唱える傾向もあるであろうが、それは、聖俗論の範囲の中の小さな修正に過ぎない。別の方向は、聖と俗の区別を飛び越えて、聖俗分離のかなたに、聖と俗の一体化の世界を見ることではないか。聖と俗は対立するというより補足しあっているものと見られる。まだ確証はあるとはいえないが、ビヨンドの志向ともいうべき、超越した理論を構成したい。

世界、日本の宗教社会学界の指導者、新鋭研究者ともいべき人々の執筆したこの特集号が、世俗化論再考となれば、まことに幸いである。

(やながわけいichi・国学院大学教授)